新岡垣風土記 第448回

神社の棟札を読む③
―氏森神社の棟札―

岡垣歴史文化研究会　石田　健次

氏森神社（山田区）は、江戸時代から安産守護の神社として崇敬されてきた。明治6（1873）年には、この神社の客殿を利用して岡垣で最初の小学校が開設されている。

社殿の老朽化が進んだことにより、明治29（1896）年に神殿及び弊殿が再建された。

再建にあたっては、当時の山田区だけでの再建は不可能であったため、明治27（1894）年に近郷在住の敬神者に寄附を募っている。

再建された神殿は、神社建築の「流造」といわれる様式で、再建時の棟札が残されている。

棟札の大きさは、総高106センチメートル、肩高101・5センチメートル、肩幅25センチメートル、下幅23センチメートル、厚さ1センチメートルである。

棟札中央には主文が書かれており、「奉再建氏森神社神殿弊殿二宇」とある。氏森神社の神殿と弊殿の二棟を再建したことが記されている。

主文の右側に「紀元二千五百五十六年」、左側に「明治二九年五月一日」と記されており、氏森神社の神殿及び弊殿が明治29（1896）年五月一日に再建されたことが分かる。

主文の下には願主（がんしゅ）として、「願主山田區氏子中」と記されている。当時は山田区の全戸が氏子であったと思われる。

願文は、「天氣和順五穀豊登」「國家静謐安産應護」とあり、天候が穏やかで穀物が豊に稔ること、国内が穏やかであることを願い、また、氏森神社が安産の神社であることから、安産守護を願いとしている。

その他に、神職として郷社社掌の名前と15人の新築委員が記されている。

【棟札に書かれた建築の匠たち】

- ●大工棟梁
- ●大工
- ●家根師
- ●木挽（こびき）棟梁
- ●石工（いしく）

建築に携わった匠たちは、大工の棟梁が3人と島根県岩見国那賀郡二宮村大字神主（現在の島根県江津市二宮町）の大工2人の名前が記されている。

本殿の檜皮葺（ひわだぶき）屋根は、糟屋郡の家根師によるものである。また、木材を製材するための木挽棟梁の名前と本殿建築で重要となる基礎工事を行う石工の名前が記されている。本殿の基礎は明治28（1895）年10月には完成している。

氏森神社は、再建から126年を経過している。本殿の檜皮葺屋根が昭和60（1985）年1月に銅板で覆われた以外は、神社建築様式の流造の特徴でもあるさまざまな彫刻とともに、再建当時の姿をそのまま残している。本殿の向拝には龍の彫刻があり、再建時から参拝者を見守ってきた。

▶氏森神社再建時の棟札

▶檜皮葺の氏森神社神殿